

愛知の博物館

No. 42



横山大観作 「靈峰春色」 桑山美術館

横山大観作 画題「靈峰春色」(昭和18年頃の作品)

横山大観(明治元年～昭和33年)茨城県水戸市生まれ。東京美術学校絵画科卒業。

日本画の近代化に大きく貢献した岡倉天心のもとで菱田春草・下村觀山らとともに日本美術院創設に参加し、当時朦朧体と酷評された色彩を主とする没線描法を生みだし、西欧の自然主義を取り入れようと試み、新しい日本画創造を目指した。さらに大観は日本画顔料のマチエールの弱さを克服するために墨と色彩とを等価におき、墨を色彩としてとりいれた。

大観は大正時代中頃より日本の象徴としての富士を好んで描き始めた。富士に対し「富士を描くということは富士にうつる自分の心を描くことだ。」と語っており、大観の精神面に重きをおく姿勢がうかがわれる。

この絵は雲煙の彼方に屹立する靈峰が気高くそびえ、墨彩で描かれた山肌が清浄に輝きわたっている。そして前景に桜花が端然と咲きほこっている。墨と色彩の対比を極限にまでおし進め、さらに不動の富士と移ろう桜花との対比が見事に描かれている。

「大観」の款と朱文丸印「鉦鼓洞」がある。

桑山美術館 青 明 美

目 次

●博物館の人物収集	2
●三県博物館交流研修会に参加して	3
●愛博協研修会報告	4
●学芸懇談会この一年の活動を振りかえって	5
●ガスエネルギー館	6

博物館の人物収集

金子 功

大分以前のことであるが『博物館は物をして語らしめるところである』という迷言を唱えた人がいた。この人は、今はもう亡くなつたが、この種の言葉を創作することが得意で、しかも博物館仲間では指導的立場にある人物だと、自他共に認めていただけに、以来、この言葉が仲間で、一つの姿勢であるかの如く思われていた時期があった。私はこの言葉には異論がある、『物は語らない、博物館は人が物を通して語るところである』というべきではなかろうか。

『物を集めて展示しておけば、それでこと足れり』という、物を中心という思想に、いささか抵抗を感じていたからである。

博物館の生命は物(資料)であることには異論を、さしはさむ余地はない。しかし、その物を生かすも殺すも人であることも、たしかであろう。

ここで人と云えば、博物館人、つまり博物館に勤務している人だけではなく、博物館を取り巻く人も含めている。

反省してみれば、何とうぬぼれてみても、私自身も含めて、博物館の学芸職員などが持っている知識の深さや、話題の広さなどというものは、たかが知れている。博物館を訪れる人の中には、私達では足元にも及ばないような、学識経験の豊かな人が、沢山いることを思い知らされることがしばしばある。

『東西南北』の誌上で山田蓉氏が、

『博物館を訪れる人々の中に、博物館にとって其の活動を増大させる要因を持っている人は決して少くない——』と述べておられるが、その反面では『博物館が年間を通して、入館者に直接接觸を持つ機会はそれほど多くない』とも云っておられる。

実は、博物館(博物館職員)が、入館者と直接接觸を持つ機会がそれほど多くない、ということが問題である。これを逆に考えると、入館者は、物を見る以外には、博物館の職員に直接教えを受ける機会が、殆んどないということになる。

このような館は、私達のような小さな個人施設で、来訪者の応対をしている者からみると、想像もできないような味気ない博物館といえる。

私達のところを訪ねてくる人達は、私に会って話を聞くことを、第一の目的として来る人が大部分であるから、その一人一人と接觸がないということは、まず考えられない。

このことは楽しいことであると同時に、恐しいこ

とでもある。良いにつけ、悪いにつけ、館に対する批判(てごたえ)を、まともに受けなければならぬのだから、僅かの手抜きも許されない。

何気なく話をしているうちに、次第に受け答えが核心をつくようになる人がある。これは『ただもの』ではないと思って、名前を伺って名刺を戴くと、大学でこの道が専門の研究者だということがわかり、恐縮することがある。しかしこれが縁になって、以来私のところの、知恵袋として、大いに相談に乗っていただいている。

あるいは専門外の方であっても、運営の相談役として、協力していただいている方も何人かある。いずれも、わずか数時間の話の中で意気統合した人達ばかりである。私はこれを仲間の掘り出しを、人物収集と云っているが、こんな人達に巡り会うことが楽しみで、毎日来訪者の応対をしているともいえる。

物を集めのではなく、人物を集めることも、博物館の収集活動の大切な仕事と思っている。

私事で恐縮であるが、豊橋向山天文台時代のある日の夕方のこと、人品卑しからざる紳士が、高級乗用車を乗りつけてきたことがある。名古屋から静岡県に帰る途中で、豊橋に天文台があるという話を聞いて、興味を抱いて、一休みがてら、立ち寄ったものらしい。

昼間のこととて、星を見せるることはできなかったが、丁度、中天に薄く見える月を見せたら、噴火口の姿には驚いたようだった。

家内が入れてきたお茶を飲みながら、天文学の歴史から、宇宙旅行、果ては哲学的の話にまで話が弾み、ついでに個人で経営する天文台が財源に苦労する話から、もっと大きな望遠鏡が欲しいということまで、隣で秘書らしい青年がしきりに、時計を気にしているのにもかまわず、2時間以上も、私の話を聞いて帰っていった。

そのときは、話に夢中になって名前も聞かなかつたので、後で家内と『何をしている人だろう、会社の社長さんらしくもなかつたが』と話していたが、やがて忘れてしまった。

一月程過ぎた頃に、静岡県にある新しい宗教団体から手紙が来た、開いてみると、先日の紳士はここでの教祖だったのだ『先日は大変楽しいお話を聞かしていただき、久しぶりに、心が洗われた思いがいたしました』という書き出しで『富士の裾野の新緑が見事ですから一度遊びにおでかけになりませんか』と多額の旅費が同封してあった。御好意にあまえて、裾野にある教团の本部にでかけて行くと、すっかり

歓待されて帰ってきた。ところが、その後この教祖は私の信者になってしまった。断わっておくが私が信者になったのではない、彼が私の信者になったのだ。

後になって向山天文台に備えられた、30cmの望遠鏡は、この教祖が出してくれた資金でつくられたものである。こんなことから、私は日本のヘールと云われた。(註)

世の中にはインチキ宗教に金を巻き上げられた人は多いが、教祖から金を引き出したのは金子さんだけだと話題になったものだ。これも私の金集めの手腕ではない、豊富な話題が魅力で、私の信者になってくれたのだろうと思う。

どんな人でも、初対面の時に誠意をもって応対するという心構えが、よい協力者を得る理由であろう。おおげさな云い方をすれば、一人一人との応対が真剣勝負である。

この教祖の話は特殊な例であるが、個人博物館の場合には、館長の個人的魅力が館を支えているともいえる。私自身は、私のところを『金子塾』などと云っているが、ある人はふざけて、ここを『金子教の本山』とも云っている。私に云わせれば、本山で結構『信者になる人は寄っておいで』と云って、信者(?)を迎えている。

私のところでは、この信者達を同人と呼んでいる。何かといえば力になって貰える人達である。

どこの博物館にも『友の会』という組織があるのが普通である。通常『友の会』というのは、博物館から特別なサービスを受けられる仲間という性格が強いが、私のところの同人はむしろ『スタッフ』である。館の運営に必要な専門知識や技術だけでなく、巾広い力をつけるための、頭脳、技術集団であり、この人達に支えられて、魅力のある館に育てていきたいと思っている。

そのためには、あらゆる分野で、一芸一能に秀でた人を網羅したいが、現在のところでは、医者と法律家が仲間にいないのが残念である。

(註) アメリカのパロマ山に200インチの反射望遠鏡をつくったヘール博士は、財界人を動かしては、その資金で天文台をつくることの名人だった。彼は若かりし頃に、シカゴの富豪ヤーキースの力を借りて、当時、世界最大の90cmの屈折望遠鏡のあるヤーキース天文台をつくり、後には、ウイルソン山天文台の中に、パサデナの金持フーカーが寄付した資金で、

100インチの反射望遠鏡をつくった話などは有名である。

(御園高原自然学習村)

愛知・岐阜・三重 「三県博物館交流研修会」 に参加して

安田 幸市

いつの場合もそうであるが「研修会」の参加には、研修課題に対する若干の期待と共にその研修地の興味があり、更にそこに集まる未知、あるいは旧知の人々に出会う楽しみがある。むしろ役者を期待している私にとって今回の研修会は、一昨年の湯の町下呂での「六甲おろし」の雪辱を晴らすべく「燃えよドラゴンズ」を声高らかに歌うはずであったが……(今年こそ愛知の地で…。)

さて、今年度の研修テーマは「各博物館におけるPR活動について」と極めて興味を覚える内容であった。参加者から各館の実情を報告することから始められ、近年話題になっているテレホンカードや、新聞、テレビ等への対応の具体例が話された。多分に観念的になるが、結局は熱意と努力という事かなと理解した。もとより、各施設を取り巻く状況は千差万別である。その立地、目的、性格や、扱う資料も又同様である。話題性、意外性に乏しい地方の当館にとり、テレホンカードの発行等は、近い将来も含めて無縁のものと思われ、その意味で会議の持ち方については一考あっても良いと思われた。が、教えられることも多かった。中村鳥羽水族館長の「間断無く各報道期間に資料を送り続けること、その場合写真も添付すること、各機関もそれを望み、オフレコになっても資料は蓄積されていること——」の報告が印象的であった。何かの間違いでクローズ



アップされる場合もあり得ることを知った。

ささやかでも人に伝わる熱意は嬉しいものである。日本カモシカセンターの諸氏の昼夜にわたる歓待や菰野町郷土資料館の先生(誠に申し訳ないがお名前を忘れてしまった)には、内容も然のことながら、

活動に対する姿勢に胸打たされるものがあった。夜の交流会は、御在所山頂の静寂な環境とは裏腹に、毎度の通り騒然と、かつ有意義にもたれた。

PR活動を含む博物館活動の活性化とは、恒常化に追及され、実践されねばならない課題であろう。



今回の研究会で知り得た人々、限られた情況のなかで、ささやかな中にも真摯な姿勢を保ち、自らと、自らの周囲に対峙している人々と接したことこそ、私にとってこの研究会に参加した意義があると言えよう。

(三好町立歴史民俗資料館)

昭和61年度 愛知県博物館等職員研修会

竹内 弘明

1. はじめに

みだしの研修会は、昭和61年9月11、12日、県陶磁資料館を会場に開催された。第1日は博物館におけるボランティア活動をテーマとする3館の事例発表及び質疑応答、第2日は作陶実習及びマスプロ電工美術館見学という日程であった。以下に、3館の事例発表について略記する。いずれも、口頭発表に質疑応答による補足を加えたものである。

2. 三重県立美術館の事例(森田氏)

①開館時より受入。「ボランティアけやきの会」を組織(会則有)。②現在77名。全員友の会会員。津市在住中年女性が大半。③教養講座(常設展については年9回)を開催して養成。④印刷物の発送、団体誘導、展示解説(小中学生対象—初めての団体・それ以外の団体・常設展・企画展等の各解説プログラムを用意、高校生以上の解説は学芸員)、映画会運営等が主な活動内容。月に1~2回活動、希望日時申出の形をとるが、非常呼出もある。⑤ボランティア保険未加入。⑥友の会及び協力会(売店経営、出版事

業等)から財政的援助があり、研修旅行等に充当。⑦売店、看視等にアルバイトを雇用(賃金を支払うべきものには支払うという考え方による)。⑧美術館活動の一環と位置づける。

3. 半田市立博物館の事例(山田氏)

①前身の資料館時代から受入。②友の会の目的のひとつに館活動への協力をうたう。他に個人の申出も。自営業、学生等。③養成講座等無。④受付、巡視、展示解説、展示作業、資料整理等。⑤ボランティア保険加入。⑥友の会に対しては館から財政補助。⑦資料整理のアルバイト⑧自然発生的なものでありボランティアの官製化を避ける。

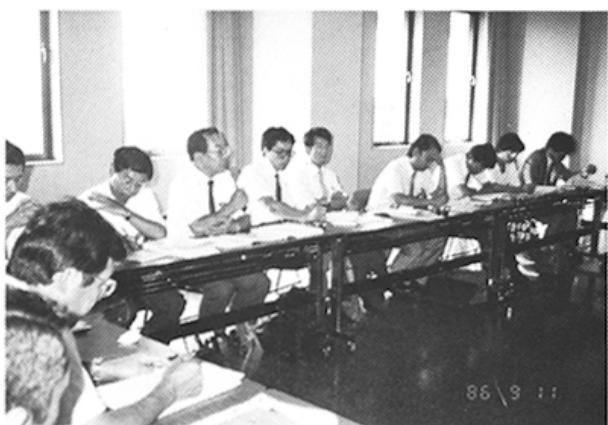
4. 名古屋市見晴台考古資料館の事例(野口氏)

①毎夏開催の市民参加による見晴台発掘において、開館以前の調査団の学生、教員相当部分をボランティアとして受入。②今夏調査71名(全参加者の約13%)。18歳以上。ボランティア登録約200名。約半数が友の会会員。教員、学生、会社員、主婦等。③事前説明会、学習会有。ただし、現場で養成が現実。④発掘調査参加者への指導が十分か、参加者の欲求が充たされているかのアンテナ。発掘調査。⑤ボランティア保険加入。⑥交通費支給。⑦事務補助のアルバイト。⑧奉仕活動ではなく発掘のボランティア。

5. おわりに

ボランティア活動に関する考え方については、それを申し出るにせよ、受け入れるにせよ、様々な変差がある。博物館におけるそれについて言えば、無償の勤労奉仕ではなく、各自の能力や趣味に応じた社会参加、学習の意欲への対応が求められることも少くないかと思われる。三重県立美術館の事例において、お手伝い、雑用のボランティアから美術館ボランティア、個性を生かしたボランティアへ移行しつつある段階にあると発表されたのもそうしたことを物語っている。奉仕活動ではなく発掘ボランティアであるとされた名古屋市見晴台考古資料館の事例は、ボランティア活動に参加する人々の様々な欲求に対処することのむつかしさを考えずには居れない事例であろう。一方で、17例のボランティア活動について発表された半田市立博物館の事例は、ボランティアの受入が、活動内容の限定や、組織、制度の整備によってのみでは済まされない広がりをもつ必要性のあることを示してもいる。いずれも、博物館におけるボランティア活動の受入が求められていると考える場合に、大変に貴重な事例発表であり、有意義な研修会であった。

(名古屋市博物館学芸員)



学芸懇談会この1年の 活動をふりかえって

学芸懇談会は、昭和58年11月29日に第1回の会合がもたれてから、奇数月の第2水曜日を目安として開催され、4年を経て21回を迎えた。毎回、およそ15人ほどの参加者がある。活動といつても、何か報告すべきまとまったものがある訳ではありませんので一参加者としての感想を述べてみようと思います。

結局のところ、博物館施設のようなところに一人でいるとどうも寂しくなるのか、冬の寒い時でも夕方になると会場へでかける。そこで、参加した人の顔を見ると何となく落着く。話題云々よりそのことに魅力を感じることの多い会である。それゆえ続いているのではないか。とはいって、いろんな人が集ま

ってきての会話は一つ一つ実に有益なものである。帰りの電車でいつもなるほどなるほどと反芻している。せっかくですから、個々の話題や会の様子をみんなでまとめていければと思っています。

ところで、この会の運営にあたっては、話題提供者や会場などの手配について、市立名古屋科学館の三輪克氏に大変お世話になっている。三輪さんは、ほとんど毎回出席され、実に幅の広い情報を提供していただいている。おそらく、三輪さんがおられなかったらこの会もここまで続かなかつたでしょう。今後、会場については熱田神宮宝物館の方で御便宜を図っていただけるよう、交通の便もよく大変有難く思っております。

この1年間の話題と話題提供者は、次のとおりです、話題を提供していただいた方には、御多忙の中無報酬で快くお引受けいただき厚くお礼申し上げます。

第16回(昭和61年5月21日)

○博物館における情報処理について・その2

—名古屋市博物館 松村冬樹氏—

第17回(昭和61年7月16日)

○鷹の文化史

—日本鷺鷹センター 中島欣也氏—

第18回(昭和61年9月17日)

○博物館活動と地域社会

—名古屋市博物館 犬塚康博氏—

—常滑市民俗資料館 中野晴久氏—

(この会の話題提供については、愛知県博物館協会発行の「東西南北」に、犬塚「徳山と志段味と博物館と人々」No.164・1986. 11、中野「フィールドワークとしてのI.W.C.A.T. 参加」No.165・1987. 1、と題して発表されている。)

第19回(昭和61年11月26日)

○環境設計からみた展示

—(株)電通名古屋支店 木村 実氏—

第20回(昭和62年1月21日)

○「学芸職員大いに語る」新年懇話会

第21回(昭和62年3月11日)

○博物館をめぐって

—名古屋大学理学部 糸魚川 淳二氏—

(学芸懇談会世話人 岩田正人)

(タ 立松 彰)

新加盟館紹介

ガスエネルギー館

GAS ENERGY EXHIBIT HALL

所在地 〒476 愛知県東海市新宝町507-2

電話 (052)603-2527

交通 名鉄神宮前駅から車で約15分

名鉄柴田駅から車で約5分

沿革 現在の都市生活と密接に結びつき暮らしを支えているエネルギー都市ガス。この都市ガスはどのようにつくられ、家庭やビルや工場に送られ、使われているのか。

こうした疑問にお答えし、ガスエネルギーの今日と明日の姿についてのご理解と関心をより深めていただくため、東邦ガスは総合技術研究所本館内にガスエネルギー館を開設しました。

施設 ロビー(1階) 110m² 収

映像ホール(7階) 240m² 収容人員 200名

展示ホール(6階) 990m²

展望室(塔屋) 120m²

集会室(7階) 80m² 収容人員約50名

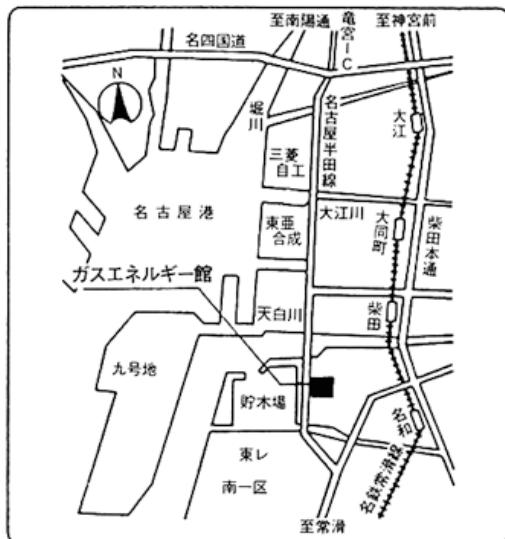
開館 10:00~17:00

休館日…土、日、祝日、年末年始

但し、第1日曜日は開館しています。

入館料 無料

特色 当館は7階映像ホール、6階展示ホール、塔屋にあります展望室より構成されており、映像ホールでは16mmとスライドを併用した三面マルチスクリーンで映画を上映、又、各シートに応答用押しボタンがついておりクイズが楽しめます。



展示ホールは多彩な展示技法を駆使した展示、実験などにより都市ガスのすべてを“つくる”“送る”“使う”の三つの視点から楽しくわかりやすくご紹介いたします。

地上36メートルにある展望室では臨海工業地帯や名古屋港、名古屋市、そして濃尾平野をとりまく山々の眺望をお楽しみいただけます。地域の皆さまをはじめ多くの方々、とりわけ次代を担う小中学生の社会見学の場としてお役に立つものと考えております。



「愛知の博物館」No.42

発行日 昭和62年3月25日

編集・発行 愛知県博物館協会

〒489 愛知県瀬戸市南山口町234番地

愛知県陶磁資料館内

<0561> 84-7474